新しく生まれ変わるために

女川町立女川小学校　五年　大江　悠也

あの日、あの時、ぼくは女川第二保育所の年長組でした。お昼寝の最中に、何とも言えないような地響きがなり、建物が大きくゆらされました。ホールの天井のライトが落ちて、保育所の先生が、とっさに、

「布団をかぶって。」

大きな声で叫びました。地震がおさまってから、みんなで近くの女川第二小学校に避難しました。そこには、当時、四年生の姉がいました。多くの人が、何が何だかわけがわからない状態だったと後で聞きました。たぶん、多くの人が泣いていたと思います。すぐに津波が来て、ぼくたちはさらに高いところに避難しました。雪も降り始めました。電気が使えなくなり、あたりは暗くなりました。父母が車でかけつけてくれたので、その夜は車の中で寝たことを覚えています。

その後は、親せきの家などにお世話になりました。四月になって入学式が行われることになり、ぼくは女川第二小学校に入学しました。指ヶ浜にある家は流され、入学式のためにおじいさんに買ってもらった机や洋服、ランドセルも全部流されてしまいました。ぼくは、母といっしょに普段着で参加しました。おじいさんに入学式の様子を見せてあげることができなかったのは、とても残念でした。おじいさんは天国で、ぼくたち家族を見守ってくれているんだなと思いました。

あの日から、間もなく五年が経とうとしています。ぼくたちは、清水にある仮設住宅で暮らしています。ホタテ漁をしている父母はすぐ前を向きました。

幸い、新せきの方がぼくの家の船を沖に出してくれたおかげで「勝栄丸」が残りました。父も母も、すぐに指ヶ浜のがれきの片づけをし、養殖の資材を調達し、稚貝を北海道から購入し始めました。母は、うちのお父さんは、海の仕事でしか生きていけない。私もお父さんと一しょにがんばるしかないと覚悟を決め、がんばったのだそうです。そのかいがあって、一年後には、ホタテを出荷できるようになりました。父は、津波ですべてを持っていかれたものを取り返した思いだと喜んでいました。母は、ようやく第一歩を踏み出したと思ったそうです。今では、震災前と同様に、午前二時から働いています。もちろん、休みの日には、ぼくもホタテの耳つり作業を手伝います。

今、女川の町は急ピッチで新しい町に生まれ変わろうとしています。新しい駅もできました。新しい商店街もできました。何よりも、ふるさとである指ヶ浜の宅地の造成が進み、ぼくたち家族も、もうすぐ新しい家に入ることができます。父母が家族のために一生けん命に働いていた姿を、ぼくは絶対に忘れません。これまで、日本中の多くの人に支援していただいたことも忘れません。父母のように前を向いて進み、新しい思い出を作り直していきたいと思います。

震災を経験してはっきり見えたぼくの夢

登米市立佐沼小学校　六年　宮城　温人

現在六年生になったぼくの夢は、父の経営しているガソリンスタンドの店をつぐことだ。ぼくがそう思うようになったのは、平成二十三年三月十一日におきた東日本大震災を経験したからだ。その大津波により、家もスタンドもすべて奪われた。

それでも父はがれきの中に残されていたタンクが無事だったため、震災から約二週間後に営業を再開した。

店の前は、防災対策庁舎の骨組みだけが残され、周りの風景はがれきの山だった。

そんな中で経営を続けた父。燃料を求めて次々に入ってくるお客さんに対し、常に笑顔で接し、大きな声で、

「ありがとうございました!!」

と、頭を深く下げてお客さんを見送る父の姿を見て、ぼくは、（かっこいい!!お父さんのようになりたい!!）と、思うようになった。

何もなくなってしまったスタンドは、給油するための計量機、プレハブの事務所、簡易トイレと手洗い用の水タンクのみ置かれていた。屋根もない状態で、雨の日も雪の日も夏の暑い日ざしが照りつけるもう暑日にも、毎日毎日一生けん命営業を続けていた。

そんな父をぼくは心の底から尊敬している。

父のような経営者になるためには、ぼくはこれからどのようなことが必要なのかを、考えた。まず、いろいろな知識を得るために、自分は勉強しなければならないと思う。

「リーダーになる人は、だれよりも知っていることが多くなければならない。」

と、父に教えられたことがある。

ぼくはその言葉を聞いたときに、とにかく一生けん命勉強しなければならないと思った。

震災から一年半後、父は別の場所に新しいガソリンスタンドをオープンした。

ぼくは、オープニングイベントを一日手伝った。

スタンドは、たくさんのお客さんでいっぱいになり、お客さん一人一人はみんな笑顔だった。

そんなお客さんの笑顔を見て、ぼくもとてもうれしい気持ちになった。

あの震災から五年目をむかえた今、父はぼくに、たくさんの勇気とあきらめない気持ち、そして、たくましい心が必要だということを教えてくれた。

いつか必ず父のようになって、この店が何年先までも残せるようにしたいと思う。

東日本大震災から五年目をむかえて

気仙沼市立馬籠小学校　六年　千葉　哲

「大きくなって帰ってきてね。」

そう言って、サケの稚魚を放流したのが、平成二十三年三月十一日でした。あれから五年目をむかえようとしている今年の秋、あの年に放流されたサケが川をのぼってきたというニュースを耳にしました。

東日本大震災が起きた時、ぼくは小学校一年生でした。何が起きたのか分からないほど、大人もパニックになっていました。ぼくの家は、山の中にあるので津波の被害を受けることはありませんでしたが、家の中はいろいろな物がたおれてぐちゃぐちゃの状態でした。しばらくたって見ることができるようになったテレビからは、大きな被害の状況が伝えられていました。家族を亡くした人や家を失った人も数えきれないぐらいいました。とても悲しいことだと思いました。

一年生の時、ぼくは、自分の気持ちを家族や先生、友達に伝えることが得意ではありませんでした。分かってもらえないイライラから、暴れてしまうこともありました。また、食べ物の好き嫌いも多く、給食を完食したことはほとんどありませんでした。

あれから五年目をむかえる今、振り返ってみると、ぼくは、心も体も大きく成長したような気がしています。給食も好き嫌いをしないで食べることができ、ほとんど毎日完食することができるようになりました。また、自分の気持ちを素直に伝えることができるようにもなりました。苦手なことは、まだまだたくさんあるけれども、いろいろなことに挑戦しようと頑張っている自分がいます。

総合的な学習の時間で活動している「少年消防クラブ」では、避難訓練を通して「自分の命を守る」ことを学びました。また、応急処置や心肺蘇生法の訓練では、「人を助ける」ことを学んでいます。テレビでは、他の地域や海外で起きた自然災害のことがニュースで流れることがあります。ぼくは、とても悲しい気持ちになります。そんな時、ぼくは「自分にできることは何だろう」と考えます。

でも、今のぼくには、大きなことはできません。ぼくができるのは、学校の勉強を頑張って、今考えている夢に向かって頑張っていくことだと思います。ぼくの夢は、ホームランを打てるプロ野球選手になることです。ソフトバンクの柳田選手のようになれたら、みんなを元気にすることができると思います。そのために、ぼくは、野球チームに入って練習をしています。家では、お父さんとキャッチボールをしたり、素振りをしたりしています。中学校では、野球部に入り、スタメンで活躍したいと思っています。

震災から五年目をむかえ、自分のことを振り返り、成長した自分を確かめるとともに、これからの目標について、それに向かってどんなことを頑張っていけばよいのかを考えることができました。

震災から五年目の私

気仙沼市立面瀬小学校　六年　尾形　香織

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が起きました。あの日、私は浦島小学校の校庭にいました。学校は海の近くにありましたが、高台だったため、被災しませんでした。

でも、私の家は、海からすぐ近くにあり、もう戻ることはできませんでした。その後、一週間くらい、学校で寝泊まりをした後、面瀬にある祖母の家に行きました。学校も転校し、私は祖母の家から面瀬小学校に通うことになりました。

あれから五年が過ぎようとしています。私は六年生になりました。その間に、忘れられない経験をしました。

それは、黒田さんとの出会いです。私たちは、祖母の家でしばらく暮らしてから、仮説住宅に引っ越しをしました。仮設住宅の暮らしに少しずつ慣れてきた頃、毎日ラジオ体操に通ううちに黒田さんに出会いました。

黒田さんは、元看護師で、阪神・淡路大震災にあったことがきっかけで、ボランティアを始めた方です。いつも自分のことよりも人のことを考えていました。

一人暮らしをしている高齢者の方々の家を訪問して、一人一人に声がけをしていました。健康相談にのったり、生活していて困っていることがあれば介助してくださいました。

また、たくさんのイベントを企画していました。集会所には多くの人が集まっていました。私もイベントに参加したことで、たくさんの人と楽しくかかわることができました。

昨年の五月に、私は仮設住宅から引っ越しました。すると、黒田さんは、仮設住宅にいる人だけでなく、仮設住宅から引っ越した人の家にも訪問して、見回りをしている姿を見かけるようになりました。（人のことを自分のことのように思っている。黒田さんは本当に優しい人なんだ。）黒田さんは、ナイチンゲールのような人でした。そんな黒田さんは、去年、病気になって亡くなってしまいました。本当に悲しかったです。黒田さんの笑顔や後ろ姿を忘れられません。

今、私の夢は、黒田さんやナイチンゲールのような看護師になることです。気仙沼で看護師として人のために働きたいです。そのためには、これからたくさん勉強し、がんばっていきたいです。また、未来の気仙沼が人々が安心して暮らせるような町になるように努力したいと思っています。黒田さんにほめてもらえるような人になりたいと思います。

父から学ぶ

南三陸町立志津川小学校　六年　後藤　華紗

ある日、突然、震災による津波で、父が経営する店が消えました。鉄筋でできた小料理屋は、骨組みと外壁の一部が残り、街全体と同様にがれきそのものになってしまいました。

父はその様子に本当にがっかりして言葉もなく悲しそうでした。震災と同時に仕事もなくなり、避難所で暮らすことになりました。今思えば、どんな思いでいたのだろうかと思います。私はまだ一年生だったのでよく覚えていません。しかし、父はその頃、これからの生活のこと、仕事のことを考えていたそうです。町もなくなり、これからどうなるのだろう、店を再建する土地もないとぼう然としていたそうです。

しばらくして、父は、店を建てられないなら、移動販売はできないのだろうかと考えるようになりました。今まで店に来てもらっていたお客さんに会いたい、食と笑顔を提供したいと考えるようになったのです。

そこで、父は販売する車や調理器具、冷蔵庫、冷凍庫など必要な道具を考え、準備を始めました。販売をする場所や店の経営などについてもこれまでとは違うかたちです。一生けん命どうしたらいいか考えたそうです。

震災から四ヶ月後、新しい店「しお彩」として移動販売がスタートしました。予定を立て、メニューを考え、それを各仮設住宅のポストに入れて歩きました。私も、みんな来てくれるといいなと思いながら父と一緒にチラシを配りました。

移動販売は、各仮設住宅を定期的に回っています。買い物をするにもお店がなくなって不便なこともあり、たくさんのお客さんが並んで待っていてくれることもあります。

軽トラックでの移動販売は、雨の日も風の日も、かんかん照りの暑い日も雪の日も行います。せまい中での調理は大変です。揚げ物なども大変です。時には、父は手やうでにやけどをして帰ってくることもありました。それでも父は、次の日には元気に出かけていきます。

移動販売も四年目を迎えました。かさ上げ工事によって、ちょくちょく販売する場所を変えなければならなくなり、予定が立てづらくなっているそうです。

これから、新しい商店街の工事も本格的になると思います。念願の以前のような店を再開できる日ももうすぐです。

私たち家族は今も四畳半の仮設住宅に住んでいます。父の仕事道具を置くこともできません。津波でたくさんのものを失いましたが、父のがんばっている姿を間近に見ることのできた四年間でした。災害にあっても負けない心、自分の未来を切り開いていく行動力、家族のために一生懸命な姿、何よりもいつも笑顔でいる父の姿は私の手本であり、自まんです。

これからも妹や弟の世話をしながら、父の仕事を少しでも助けていきたいと思います。

震災から五年目を迎えた自分

南三陸町立入谷小学校　六年　山内　陽菜

「ゴゴゴゴゴゴ・・・ガタンガタン・ダダーン。」

放課後、校庭で遊んでいた時、突然大きな音がして、地面がゆれました。私は何がおきているか分からず、ただ地面に座っていました。先生たちがいつもと違う、こわい顔で校舎から走ってくるのが見えました。高学年の人たちも先生方と一緒に校庭に出てきます。私の兄たちもびっくりした様子で出てきました。

とても寒い日でした。志津川の方からたくさんの人が入谷小学校に来ました。中には泣いている人もいました。大きな声でけんかのようになっている人たちもいました。私は何かすごいことが起こったんだと感じていました。

その日の夕方まで通学バスで過ごしました。お母さんが迎えに来てくれて、やっと安心しました。私の家は海から離れているので津波の被害はありませんでしたが、電気、ガス、水道がすべて止まりました。さらに、津波で被害を受けたおじ、おばの家族が避難してきたので、すごい人数で暮らすことになりました。電気が使えなかったため、洗濯も手で行いました。また、水が使えなかったので、山のわき水をホースで引いて使いました。これまで、電気や水道を使った生活が当たり前だった私は、これらのものが使えない生活がどれだけたいへんなのか、改めて知ることができました。

食べ物も不足し、家にあった食べ物を食べてしまった後は、支援物資の食べ物を食べることも多くなりました。それまで好き嫌いを言って食べない食べ物もありましたが、私は震災を機会に好き嫌いを言わないようになりました。

苦しかった避難生活も数ケ月後には電気、ガス、水道が復旧し、私の家も震災前の生活が戻ってきました。

五年たった今でも、私の友達や親せきで仮設住宅に住んでいる人もいます。南三陸町では生活に必要な道路や建物がだんだん作られるようになってきました。町の人たちはもちろん、県内だけでなく、全国からたくさんの方が町の再建のためにがんばっていることが本当によく分かります。私も南三陸町に住んでいる一人として、町の再建にできるだけ協力したいと思ってます。

先日、学校で友達とどんなことができるか話し合いました。「募金の協力やボランティア活動への参加」という考えが出されました。私はどんなことができるか、考え中ですが、すばらしい町に再建される南三陸をこれからも大切に、大切にしていきたいと思います。